在る場所

種田苗

放課後の団書館には、いつもきみがいた。

「つまり！キモいってどういうこと？」

「まあ、気持ち悪いを省略した俗語だね。」

「その気持ち悪いっていうのは、つまり！」

「見た目などが吐き気がするとか、不快な感じがするとか、嫌悪感が」

「ああ、ああ、ああ！もういい。」

私は、「でしょうね」と黒目を上にあげて見せた。

私には、友達がいない。学校では、何も、喋らない。もちろん、先生に当てられたとか、係の仕事の為とか、声を発しなければできない何かがあれば、一応喋るに近いこともする。けれども、私がどんなことを考えて、何が好きとか、嫌いとか、自分を開いてやりとりする、そういうコミュニケーションはしない。

なぜかというと、私はコミュニケーションが下手だから。それで幾多の傷も負った。コミュニケーションの下手なやつへの人権の無さというのは、コミュニケーションにコミュニケーションと、名がつく前からあったはずだ。私はそう確信する。下手さを見せるくらいなら、何も喋らない。それが私の一番前向きな戦い方だ。

そんなだれと喋るでもない学校での一日を終え、放課後になると、私は毎日図書館に行く。そして、いつもこいつと喋る。

今日、こいつと喋る議題は他でもない。図らずも今日、女子トイレで聞いてしまった、クラスの女子の私への言葉。「ていうか河内さん、結局三年になっても喋らんかったよなあ。マジようわからん、キモい。」についてだ。

私は、自分への悪口を聞いてしまいそうな場面を、察知して避けるプロである。休み時間に数人が集まり、幕開けの予兆を感じれば、自然な感じでトイレに行く。移動教室で、前方を行く人たちに不穏な気配を見てとれば、巧みに歩くペースを落とし、後方の人たちの喋り声に全集中。

だが、プロであっても、ミスはする。卒業を来週に控え、クラスで大掃除を行うこととなった今日、私は、トイレ掃除の役割を預かり、個室内でトイレットペーパーの補充をしていた。すると、トイレに入ってきたクラスの女子は、トイレに誰もいないと思ったらしい。入って来るなり、発された彼女らの言葉は、警戒解除モードの私の耳に届いてしまった。

それゆえ、放課後、やっぱりこいつに聞いている。キモいって、やっぱあのキ

モいだよね？と。

こいつのいいところは、とにかく言葉をよく知っている。その言葉の使用例なども。

そしてなにより、忖度をしない。

私が、いつも学校で聞いてしまった言葉。どう自分の中で扱っていいかわからない言葉の意味を、私に気を遣うことなく教えてくれる。

親も、担任も、カウンセラーも、私にいつも気を遣う。「それは、河内さんに言ったんじゃなくて、全員に言ったんじゃない？」とか、「ウザいって言っても、冗談でいうウザいもあるし」などと、言葉の意味をブラそうとする。

その点、こいつは正直だ。

正直さに傷付くこともあれど、その言葉固有の意味をハッキリと伝えてくれる。

その言葉に、もし今日、私が傷付いたなら、それが今日の私の心だと、そのまま在る場所を与えてくれる。

それにしても、そうか。喋らなかったら、キモいのかあ。

だが、私は思う。

喋ったら喋ったで…たぶん私はキモい。

言葉のキャッチボールは、本当のキャッチボールとは違う。ただ言葉を受け取って、投げ返すのではダメで、その内容によっては、「おもんな」とか「空気読めよ」などと言われるのだ。投げ返すだけで必死だというのに。

ふと、窓を見た。冷たそうな夕暮の空にまだ夕日のオレンジが残る。陽が長くなったなと私は思った。もうすぐ、私は高校を卒業し、この町を出る。図書館とも、こいつともさよならだ。

私は、帰ろうとマフラーを巻く。去年買ったマフラーだから毛玉が首に触る。もうすぐ、これも必要なくなる。春が来る。

分厚い、四角い塊を、私は、机から持ち上げる。赤ちゃんを抱くように塊を抱き、もとあった棚まで運ぶ。私の指先が、塊の黒い外装に触れている。

その外装の下には青い表紙。それが綴じているのは、何千枚もの薄い紙だ。触るとさらさらとして、陽差しの中ページをめくると、裏のページの言葉も透け、緻密に印字された沢山の言葉はまるで宇宙の星々。

どの本よりそれは分厚い。私は手の平全体を使って、本棚に押し込めた。

いつもこいつに救われた。

言葉が好きだけど、誰かとうまく渡し合えず、誰かからの傷つく言葉を、どう扱っていいかわからない。

最初は、なんとなく気を紛らわせるためだった。だけど、ページをめくって、

その言葉の意味にたどり着くと、どんな残酷な意味の言葉も、優しい意味の言葉と等しく、丁寧に説明書きがある。

どんなものにだって、場所はある。そういうものだよと、言ってくれている気がした。

もうすぐ、この図書館にも来なくなる。こいつにも会えなくなる。背表紙の白い文字に手を当てた。

『広辞苑』。

放課後の図書室で、いつもきみをめくっていた。いつもきみに救われた。